

〈原著論文〉

幼児用情動コンピテンス尺度の作成

西 元 直 美*

Development of an Emotional Competence Scale for Young Children

Naomi Nishimoto

要旨：本研究は幼児期の情動コンピテンスについて検討するための幼児用情動コンピテンス尺度を作成することを目的としている。先行研究においては成人や思春期、児童期における情動コンピテンス尺度が開発され、その信頼性および妥当性が確認されているが、幼児用の情動コンピテンス尺度は開発されていない。そこで、先行研究の下位尺度および下位尺度項目を踏まえて、幼児を対象とした質問項目を作成し、3歳児、4歳児、5歳児を対象として、その担当保育者と養育者に回答を依頼した。ANOVAによって年齢差を検討したところ、20項目中14項目に有意差がみられた。因子分析の結果、5因子構造が確認され、因子は作成時の下位尺度と同じく「他者の情動評価と調整」「他者の情動認識」「自己の情動表現」「自己の情動調整」「自己の情動利用」と命名した。各因子の項目の評定値の平均を用いて年齢差を検討したところ、4つの因子では3歳よりも4歳のほうが有意に高かったが「自己の情動調整」因子のみ3歳と4歳の年齢差がみられず、5歳が4歳よりも有意に高いことが示された。これらの結果から、情動コンピテンスの発達を検討する上で3歳から4歳の変化が重要であり、「自己の情動調整」はゆっくり発達していくことが示唆され、今後、縦断データを用いた検討が必要であることが考察された。

Abstract: The purpose of this study is to develop an emotional competence scale for young children in order to examine emotional competence in early childhood. Previous studies have developed an emotional competence scale for adults, adolescents, and children, and confirmed its reliability and validity. However, an emotional competence scale for young children has not yet been developed. Therefore, based on the subscales and subscale items of the previous research, we created questions for young children that can be evaluated by others. We asked caregivers and nursery teachers in charge of the 20 items we identified to answer the questions for 3-year-olds, 4-year-olds, and 5-year-olds. ANOVA was performed to examine age differences for all items, and 14 of the 20 items showed significant differences. Factor analysis confirmed a five-factor structure. The factors were named “emotion evaluation and adjustment of others”, “emotion recognition of others”, “emotion expression of oneself”, “emotion adjustment of oneself”, and “use of one’s emotions”. Age differences were examined by ANOVA using the average rating of each factor item. The results showed that, among the four factors, 4-year-olds were significantly higher than 3-year-olds, but only the “emotion adjustment of oneself” factor did not show an age difference between 3-year-olds and 4-year-olds, and 5-year-olds were significantly higher than 4-year-olds. It was shown to be high. These results indicate that change between the ages of 3 and 4 is important in examining the development of emotional competence.

Key words：情動コンピテンス emotional competence 尺度作成 scale development 幼児 young children

I 問題と目的

本研究は幼児を対象とした「情動コンピテンス尺度」

を作成することを目的とするものである。

他者の情動を的確に認識したり調整したりすること

は、円滑なコミュニケーションや適応的な社会行動を行

受付日 2022. 5. 20 / 掲載決定日 2022. 9. 20

*関西福祉科学大学 教育学部 准教授

う上で重要である。自分の情動を認識することや調整することもまた、他者の情動を認識したり調整したりすることと同様に、社会行動には重要な役割を果たしている。情動をうまく処理したり、利用できるこうした力は「情動知能 (Emotional Intelligence)」という概念で示され、情動知能の高さは人生満足度の高さや、自尊心の高さ、健康度の高さと関連することや、情動知能の高い人はストレス経験時のストレスの度合いが低いことも生理指標を用いた研究によって示されている (Law, Wong, & Song, 2004; Petrides, Pérez-González, & Furnham, 2007; Schutte, Malouff, Simunek, McKenly, & Hollander, 2002; Martins, Ramalho, & Morin, 2010; Schutte, Malouff, Thorsteinsson, Bhullar, & Rooke, 2007; Mikolajczk. Roy, Luminet, Fillée, & Timary, 2007)。

情動知能という概念は Salovey & Mayer (1990) によって「自己の感情 (feeling) や情動 (emotion) を認識して、違いを識別し、その情報を思考や行動に活かす能力」と定義されているが、近年ではこの概念が「情動コンピテンス (Emotional Competence)」とも呼ばれる。野崎 (2015) は先行研究を整理して情動知能と情動コンピテンスの概念上の差異の考察を行っている。まず、知能とコンピテンスの違いとして「知能」が「良いパフォーマンスを導くための反応や行動の背後にある、最大限の能力に注目」しているのに対し、「コンピテンス」は「良いパフォーマンスと直接的に結びつく、意図に基づく行動傾向に注目」していることを指摘している。つまり、能力か行動傾向かという点が知能とコンピテンスの違いと考えられる。その上で、情動に関する知識を対象としているならばそれは「情動知能」を研究対象とする研究であり、情動と関連する反応や行動の傾向を研究対象としているならば「情動コンピテンス」を研究対象としていると考えべきであると述べている。本研究は幼児の情動に関する知識に注目してその測定を目的としているものではなく、情動に関する知識を含めて情動と関連した行動傾向に注目するものであり、適応的な社会行動に関連する能力及び行動傾向の探求を目指している。したがって、「情動知能」ではなく「情動コンピテンス」を研究対象とするものと言える。

「情動知能」あるいは「情動コンピテンス」と呼ばれる自分と他者の情動を認識し、調整し、自分の情動をうまく利用できる能力、情動を扱う能力についてのこれまでの研究の多くは成人を対象としている。しかしながら、情動の理解は発達初期から確認されているものである。視線や行動などの非言語的指標によって乳児期から表情の識別が可能であること (Ludermann & Nelson, 1988; Kotsoni, de Haan, & Johnson, 2001; Young-Browne,

Rosenfeld, & Horowitz, 2013) や、情動に関する言語と表情の対応についての理解、つまり、言語で示された情動状態の表情を選択したり、表情が示す情動を言語で表すことは 2 歳頃から可能であることが明らかになっている (Michalson & Lewis, 1985; 櫻庭・今泉, 2001)。また、状況から情動を理解する、推測するというのも、2、3 歳～5、6 歳頃にその能力が発達することが示されている (森野, 2010; DeConti & Dickerson, 1994)。このように情動の理解については発達初期からその発達が注目されている一方で、情動を扱う能力について幼児期が対象とされることはなく、また幼児の情動を扱う能力を測定する尺度は開発されていない。したがって情動を扱う能力についての発達プロセス、発達機序は検討されていないのである。そこで、本研究では児童期以降を対象とした情動知能尺度を踏まえて、幼児用の情動知能尺度を作成する。なお、本研究は幼児の情動に関する知識だけでなく、幼児の情動に関連した行動傾向に注目している。そのため、「情動知能」と「情動コンピテンス」のどちらを用いるかについては、上述の野崎 (2015) の考察を踏まえ「情動コンピテンス」という術語を使用することとする。

情動コンピテンスを測定する尺度には MEIS (Multi-factor Emotional Intelligence Scale; Mayer, Caruso, & Salovey, 1999)、ESCQ (Emotional Skills & Competence Questionnaire; Takšić, 1998)、TEIQue (Trait Emotional Intelligence Questionnaire; Petrides & Furnham, 2003)、WLEIS (Wong and Law Emotional Intelligence Scale; Wong & Law, 2002) などがある。Mayer & Salovey (1997) は情動知能の構成として、情動を評価したり表出したり理解することである「情動の知覚 (perceiving emotions)」、思考を促進するように情動を利用することである「情動の使用 (using emotions)」、情動についての知識を理解する能力である「情動の理解 (understanding emotions)」、情動を調整する能力である「情動の管理 (managing emotions)」の 4 つの要因を示しており、MEIS はこれに基づいて作成されたものである。MEIS から発展したテストとして MSCEIT (Mayer-Salovey-Caruso Emotional Intelligence Test; Mayer, Salovey, Caruso, & Sitarenios, 2003) がある。ESCQ も Mayer & Salovey (1997) の 4 つの因子に基づいて開発された尺度であるが、その下位尺度は「情動の認識と理解」「情動の命名と表現」「情動の制御と調整」であり、豊田・森田・金敷・清水 (2005) によってこれを邦訳した日本版 ESCQ (J-ESCQ) が開発されている。また、豊田ら (2005) による日本版 ESCQ (J-ESCQ) の項目数を 28 項目から 24 項目に整理した日本版 ESCQ (J-ESCQ)

(Toyota, Morita, & Takšić, 2007) も開発されている。

MEIS、ESCQ、TEIQue は西洋諸国で開発された尺度であり、日本とは異なる文化背景が想定されるが、Wong & Law, (2002) による WLEIS は中国で開発されているため日本と同じ東洋文化であることから日本においても適応可能性が高いと考えられる (野崎, 2017)。WLEIS は Davies, Stankov, & Robert (1998) の示した 4 つの下位尺度「自分自身の情緒の評価と表現」「他人の情緒の評価と認識」「自分自身の情緒の調整」「パフォーマンスをあげるための情緒の利用」に基づいて作成されたものであり、Wong & Law, (2002) は情動コンピテンスの下位概念を「自己の情動の評価と認識」「他者の情動の評価と認識」「自己の情動の調整」「情動の利用」の 4 つと定義している。しかし、「情動の利用」には必ずしも情動の利用と強く関連しない質問項目を含んでいること、他者の情動を上手く扱う側面が欠けていることが問題点として指摘されている (野崎, 2017)。そのため、野崎 (2017) は Wong & Law, (2002) の定義を一部修正し、情動コンピテンスを「自己の情動の評価と認識」「自己の情動の調整」「他者の情動の評価と認識」「他者の情動の調整」で構成されるものと定義して改訂版 WLEIS を作成している。

また、豊田・山本 (2011) は Mayer & Salovey (1997) の定義における「情動の利用」が ESCQ には欠けていることを指摘し、情動を利用する能力を含んだ尺度として、WLEIS に基づいて日本版 WLEIS を作成している。日本版 WLEIS は原版とは因子順位が異なるものの原版と同じく「情動の調節」「自己の情動評価」「情動の利用」「他者の情動評価」の 4 つの下位尺度によって構成されている。これに先行して、豊田・桜井 (2007) は思春期の情動面の査定を行う尺度の必要性に対して、WLEIS の項目数が少ないという実施の利便性から WLEIS の日本版中学生用の作成を行っている。また、同時に日本版 ESCQ (J-ESCQ) についても中学生用 (中学生用 J-ESCQ) を作成している。中学生用情動知能尺度 (中学生用 J-WLEIS) は日本版 WLEIS とは因子順位が異なるものの「他人の情動の評価と認識」「情動の利用」「自分の情動の調整」「自分の情動の評価と表現」の 4 つの下位尺度で構成されている。ESCQ は 3 因子構造であり中学生用 J-ESCQ も同様に 3 因子が抽出され、因子は日本版 ESCQ (J-ESCQ) と完全に一致していたため、同様の命名がなされている。さらに、豊田・吉田 (2012) は小学生を対象とする尺度として児童版情動知能尺度を作成している。これは中学生用 J-WLEIS と中学生用 J-ESCQ に基づいて小学生用に表現が修正されたものであり、分析の結果 1 因子構造が確認されてい

るが、中学生用 J-WLEIS の下位尺度に対応して作成されたものである。

WLEIS は野崎 (2017) によって日本における適応可能性が高いことが指摘されており、また、野崎 (2017) も豊田・山本 (2011) も情動をうまく扱う能力の必要性から WLEIS に基づいた尺度を作成している。そこで本研究でも WLEIS から作成された改訂版 WLEIS、中学生用 J-WLEIS、児童版情動知能尺度に基づいて幼児用情動コンピテンス尺度を作成し信頼性を検証する。また、作成した尺度を用いて幼児期の情動コンピテンスについての横断的検討を行う。

II 方法

対象 A 県内の私立認定こども園の 3 歳児クラス、4 歳児クラス、5 歳児クラスの担当保育者および園児の養育者。

手続き 認定こども園の 3 歳児クラス、4 歳児クラス、5 歳児クラスの担当保育者および園児の養育者に対して質問紙調査を行った。保育者には担当園児全員について質問項目 (各園児の性別、生年月を含む) への回答を求め、加えて養育者への質問紙の配布を依頼した。養育者には保育者から配布された質問紙に対して無記名で質問項目 (該当園児の性別、生年月、きょうだいの有無、きょうだい順位を含む) への回答を求めた。調査は 2021 年 8 月～9 月に実施した。回答が得られたのは保育者回答データ 443 名、養育者回答データ 316 名であり、性別、生年月を除く質問項目に回答漏れのあるデータは今回の分析から除外した。最終的に分析対象となったのは保育者回答データ 417 名 (3 歳児: 138 名、4 歳児: 165 名、5 歳児: 114 名)、養育者回答データ 308 名 (3 歳児: 112 名、4 歳児: 98 名、5 歳児: 97 名、年齢不明: 1 名) であった。

質問項目 情動コンピテンスを測定する尺度のうち、大学生・大学院生を対象とした「改訂版 WLEIS」(野崎, 2017)、中学生を対象とした「中学生用 J-WLEIS」(豊田・桜井, 2007) は WLEIS を発展させて開発されたものであり、小学生を対象とした「児童版情動知能尺度」(豊田・吉田, 2012) は WLEIS と ESCQ に基づき中学生用 J-WLEIS の下位尺度に対応して開発されたものである。これらの尺度の下位尺度を整理し、幼児用情動コンピテンス尺度を作成するための下位尺度として「自己の情動の評価と表現」「自己の情動の調整」「自己の情動の利用」「他者の情動の評価と認識」「他者の情動の調整」の 5 つの下位尺度を抽出した。その上で、発達心理学を専門分野とする研究者とともに既存の尺度の各項目を踏まえ内容的妥当性を検討しながら幼児に当てはまる

Table 1 幼児用情動コンピテンス尺度項目と先行研究における尺度項目

中学生用 J-WLEIS (豊田、桜井、2007)		児童版情動知能尺度 (豊田、吉田、2012)		改訂版 WLEIS (野崎、2017)	
自分の情動の評価と表現	私は、今すぐくうれしいとかつつかいとかが、自分自身のいろいろな気持ちをよくわかっている。	うれしい気持ちがわかる	自分の情動の評価	私は、今すぐくうれしいとかつつかいとかが、自分自身のいろいろな気持ちをよくわかっている。	自己の情動の評価と表現
	私は、何か起こった時には、その時の自分の気持ちがよく分かっている。	つらい気持ちがわかる	自分の情動の評価と認識	私は、何か起こった時には、その時の自分の気持ちがよく分かっている。	
自分の情動の調整	私は、自分の気分が良い時や、嫌だなと思う時がいつも分かっている。	自分の気分がうまく言うことができる	自分の情動の調整	私は、自分の気分が良い時や、嫌だなと思う時がいつも分かっている。	自己の情動の調整
	私は何か起こった時に、自分がどうしようとしてそんな気持ちになったのか、たいてい理由がわかる。	自分の気分がうまくいける	自分の情動の調整	私は何か起こった時に、自分がどうしようとしてそんな気持ちになったのか、たいてい理由がわかる。	
他人の情動の評価と認識	私は、自分自身の気持ちをコントロールできている。	自分の気分がうまくいける	自分の情動の調整	私は自分自身の気持ちをコントロールすることが上手だ。	他人の情動の評価と認識
	私は、自分自身の気持ちがうまくコントロールできている。	自分の気分がうまくいける	自分の情動の調整	私は、難しい問題が起こった時でも、自分の気持ちを抑えて、きちんと解決できる。	
自分の情動の利用	私は、難しい問題が起こった時でも、自分の気持ちを抑えて、きちんと解決できる。	自分の気分がうまくいける	自分の情動の調整	私は、難しい問題が起こった時でも、自分の気持ちを抑えて、きちんと解決できる。	自己の情動の利用
	私は、難しい問題が起こった時でも、自分の気持ちを抑えて、きちんと解決できる。	自分の気分がうまくいける	自分の情動の調整	私は、難しい問題が起こった時でも、自分の気持ちを抑えて、きちんと解決できる。	
他人の情動の調整	私は、難しい問題が起こった時でも、自分の気持ちを抑えて、きちんと解決できる。	自分の気分がうまくいける	自分の情動の調整	私は、難しい問題が起こった時でも、自分の気持ちを抑えて、きちんと解決できる。	他人の情動の調整
	私は、難しい問題が起こった時でも、自分の気持ちを抑えて、きちんと解決できる。	自分の気分がうまくいける	自分の情動の調整	私は、難しい問題が起こった時でも、自分の気持ちを抑えて、きちんと解決できる。	
他人の情動の調整	私は、難しい問題が起こった時でも、自分の気持ちを抑えて、きちんと解決できる。	自分の気分がうまくいける	自分の情動の調整	私は、難しい問題が起こった時でも、自分の気持ちを抑えて、きちんと解決できる。	他人の情動の調整
	私は、難しい問題が起こった時でも、自分の気持ちを抑えて、きちんと解決できる。	自分の気分がうまくいける	自分の情動の調整	私は、難しい問題が起こった時でも、自分の気持ちを抑えて、きちんと解決できる。	



よう、また他者が評価できるよう文言を改変して5つの下位尺度ごとに4項目、計20項目を作成した（Table 1）。回答は「全く当てはまらない」から「非常によく当てはまる」の6件法（1～6点）とした。

倫理的配慮 調査協力園に対して研究目的と趣旨、データの取り扱いにおける個人情報保護の遵守の説明を口頭で行い調査への協力の同意を得た。質問紙調査の対象となる保育者および養育者に対しては、研究目的と趣旨、データの取り扱いにおける個人情報保護の遵守について質問紙配布時に紙面にて説明し、協力の同意が得られる場合のみ回答を依頼した。質問紙は無記名式であり、回収は個別封筒による返却とし、協力が難しい場合には白紙提出とした。なお、本研究の質問紙調査は関西福祉科学大学研究倫理委員会の承認（承認番号 21-13）を受け実施している。

Ⅲ 結果

1 幼児用情動コンピテンス尺度の項目

幼児用情動コンピテンス尺度の原案（20項目）の各項目について全データの平均、標準偏差と各年齢（各クラス）別の平均、標準偏差を Table 2 に示す。また、各項目の評定値の年齢（クラス）差を ANOVA で検討し、Tukey 法で多重比較を行った結果も Table 2 に示す。

多重比較の結果、20項目中14項目で3歳児クラスよりも4歳児クラスのほうが評定値が有意に高いことが示され、そのうち13項目については3歳児クラスよりも5歳児クラスのほうが有意に高いことが示された。また、その13項目のうち2項目については4歳児クラスよりも5歳児クラスのほうが有意に高いことも示された。年齢（クラス）の差がなかったのは、「2）嫌な気持

Table 2 幼児用情動コンピテンス尺度全項目の平均、標準偏差、ANOVA の結果

	全データ 平均 (標準偏差) n = 725	クラス別			ANOVA の結果
		3歳児クラス 平均 (標準偏差) n = 250	4歳児クラス 平均 (標準偏差) n = 263	5歳児クラス 平均 (標準偏差) n = 211	
1) うれしい時や悲しい時にはその気持ちをことばや表情等で表している。	5.22(1.05)	5.08(1.18)	5.30(0.95)	5.27(0.99)	3歳<4歳*
2) 嫌な気持ちの時にはその気持ちをことばや表情等以外の方法で表す。	4.90(1.22)	4.76(1.29)	5.02(1.19)	4.93(1.17)	
3) 自分の気持ちをことばや表情で表している。	4.98(1.16)	4.76(1.27)	5.14(1.07)	5.05(1.11)	3歳<4歳**, 3歳<5歳*
4) その時の自分の気持ちを自分なりの何らかの方法（ことばや表情以外）で表している。	4.25(1.60)	4.16(1.56)	4.20(1.67)	4.43(1.53)	
5) 自分の気持ちをがまんすることができる。	3.91(1.43)	3.52(1.34)	3.92(1.44)	4.36(1.37)	3歳<4歳**, 4歳<5歳**, 3歳<5歳***
6) 怒ったり、興奮したりしてもすぐに落ち着くことができる。	4.05(1.46)	4.00(1.46)	3.95(1.50)	4.22(1.40)	
7) 困ったことがあってもあわてたり、大騒ぎしない。	3.94(1.55)	3.91(1.58)	3.87(1.60)	4.06(1.45)	
8) 嫌なことがあってもすぐに気持ちを切り替えることができる。	3.93(1.45)	3.98(1.48)	3.82(1.50)	4.01(1.36)	
9) どんなことにも積極的にやろうとする。	4.41(1.34)	4.25(1.28)	4.46(1.31)	4.52(1.42)	
10) 褒められたり励まされたりすると、がんばろうとする。	5.20(1.02)	4.98(1.07)	5.23(1.05)	5.44(0.84)	3歳<4歳*, 3歳<5歳***
11) 何かするときには目標をたて、それにむかっががんばっているようだ。	4.46(1.30)	3.89(1.30)	4.66(1.19)	4.87(1.19)	3歳<4歳***, 3歳<5歳***
12) 機嫌のいい時にはお手伝いや自分がやらなくてはならないこと等を積極的にする。	5.08(1.11)	4.87(1.19)	5.24(1.05)	5.13(1.06)	3歳<4歳***, 3歳<5歳*
13) 周りの人がどんな気持ちなのかを感じとっている。	4.39(1.29)	3.94(1.38)	4.55(1.19)	4.72(1.16)	3歳<4歳***, 3歳<5歳***
14) 周りの人の気持ちをとても気にしている。	3.88(1.39)	3.34(1.31)	4.06(1.38)	4.32(1.28)	3歳<4歳***, 3歳<5歳***
15) 周りの人の気持ちの変化に敏感である。	3.94(1.39)	3.42(1.37)	4.12(1.37)	4.33(1.26)	3歳<4歳***, 3歳<5歳***
16) 周りの人の元気がないとすぐ気づく。	4.00(1.37)	3.48(1.37)	4.24(1.30)	4.29(1.29)	3歳<4歳***, 3歳<5歳***
17) 周りの人が悲しい気持ちになったり、不安な気持ちになっていると、その気持ちを何とかしようとする。	3.94(1.43)	3.38(1.46)	4.19(1.30)	4.29(1.34)	3歳<4歳***, 3歳<5歳***
18) 周りの人が喜ぶようなことをする。	4.36(1.27)	3.90(1.34)	4.46(1.19)	4.76(1.13)	3歳<4歳***, 4歳<5歳*, 3歳<5歳***
19) 周りの人が怒ったり興奮していると、自分なりの方法で落ち着かせようとする。	3.72(1.46)	3.19(1.41)	3.91(1.42)	4.10(1.37)	3歳<4歳***, 3歳<5歳***
20) 周りの人を楽しませることができる。	4.60(1.29)	4.14(1.38)	4.78(1.18)	4.92(1.16)	3歳<4歳***, 3歳<5歳***

* $p < 0.5$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

ちの時にはその気持ちをことばや表情等以外の方法で表す。」「4) その時の自分の気持ちを自分なりの何らかの方法 (ことばや表情以外) で表している。」「6) 怒ったり、興奮したりしてもすぐに落ち着くことができる。」「7) 困ったことがあってもあわてたり、大騒ぎしない。」「8) 嫌なことがあってもすぐに気持ちを切り替えることができる。」「9) どんなことにも積極的にやろうとする。」「10) 褒められたり励まされたりすると、がんばろうとする。」の 6 項目であった。

2 幼児用情動コンピテンス尺度の因子構造

原案の 20 項目について探索的因子分析 (最尤法) を行った。固有値 1 以上を基準として因子の解釈可能性から 5 因子構造を妥当と判断し、5 因子を仮定して再度因子分析 (最尤法、プロマックス回転) を行った。その結果、全 20 項目がいずれかの因子に .50 以上の因子負荷量を示した。因子パターンと因子間相関を Table 3 に示す。

第 1 因子は「18) 周りの人が喜ぶようなことをする。」「17) 周りの人が悲しい気持ちになったり、不安な気持ちになっていると、その気持ちを何とかしようとする。」など原案の項目尺度で「他者の情動の調整」に含まれる項目であったが、Table 1 に示した原案の項目尺度「他者の情動の評価と認識」の項目であった「16) 周りの人の元気がないとすぐ気づく。」が含まれていることから「他者の情動評価と調整」因子とした。第 2 因子はすべて原案の項目尺度「他者の情動の評価と認識」の項目であったが、「14) 周りの人の気持ちをととても気にしている。」など他者の情動を認識しようとしている様子を表していることから「他者の情動認識」因子とした。第 3 因子はすべて原案の項目尺度「自己の情動の評価と表現」因子の項目であったため「自己の情動表現」とした。同様に第 4 因子は原案の項目尺度「自己の情動の調整」の項目であったため「自己の情動調整」因子、第 5 因子は原案の項目尺度「自己の情動利用」の項目であったため「自己の情動利用」因子とした。下位尺度の信頼

Table 3 幼児用情動コンピテンス尺度の因子分析の結果 (n = 725)

	因子				
	1	2	3	4	5
他者の情動評価と調整 (α=.91)					
18) 周りの人が喜ぶようなことをする。	.86	-.07	-.04	-.01	.12
17) 周りの人が悲しい気持ちになったり、不安な気持ちになっていると、その気持ちを何とかしようとする。	.79	.20	-.02	-.03	-.07
20) 周りの人を楽ませることができる。	.77	-.15	.10	-.02	.13
19) 周りの人が怒ったり興奮していると、自分なりの方法で落ち着かせようとする。	.76	.13	-.03	.05	-.08
16) 周りの人の元気がないとすぐ気づく。	.52	.47	.01	-.01	-.09
他者の情動認識 (α=.91)					
14) 周りの人の気持ちをととても気にしている。	-.09	.97	-.01	.00	.03
15) 周りの人の気持ちの変化に敏感である。	.09	.89	-.01	-.02	-.05
13) 周りの人がどんな気持ちなのかを感じとっている。	.07	.62	.09	.02	.19
自己の情動表現 (α=.81)					
2) 嫌な気持ちの時にはその気持ちをことばや表情等以外の方法で表す。	-.07	.07	.85	-.06	-.06
3) 自分の気持ちをことばや表情で表している。	.07	.00	.85	.06	-.05
1) うれしい時や悲しい時にはその気持ちをことばや表情等で表している。	.08	-.10	.77	.03	.08
4) その時の自分の気持ちを自分なりの何らかの方法 (ことばや表情以外) で表している。	-.09	.04	.51	-.03	.06
自己の情動調整 (α=.86)					
6) 怒ったり、興奮したりしてもすぐに落ち着くことができる。	-.08	.00	.07	.92	-.04
8) 嫌なことがあってもすぐに気持ちを切り替えることができる。	.09	-.14	.02	.83	.01
7) 困ったことがあってもあわてたり、大騒ぎしない。	-.01	.03	-.14	.77	.04
5) 自分の気持ちをがまんすることができる。	.01	.21	.03	.57	.02
自己の情動利用 (α=.84)					
10) 褒められたり励まされたりすると、がんばろうとする。	.00	-.07	.03	-.06	.93
9) どんなことにも積極的にやろうとする。	.03	-.04	-.03	.09	.71
11) 何かするときに目標をたて、それにむかってがんばっているようだ。	.02	.16	-.04	.08	.64
12) 機嫌のいい時にはお手伝いや自分がやらなくてはならないこと等を積極的にする。	.01	.09	.15	-.08	.57
因子相関行列					
	因子 2	.70			
	因子 3	.62	.41		
	因子 4	.29	.40	.15	
	因子 5	.64	.53	.61	.42

性 (α 係数) を算出したところ、第1因子は $\alpha = .91$ 、第2因子は $\alpha = .91$ 、第3因子は $\alpha = .81$ 、第4因子は $\alpha = .86$ 、第5因子は $\alpha = .84$ であり、いずれも高い値を示した。

3 幼児用情動コンピテンス尺度の因子得点の横断的検討

各因子における各項目の評価点の平均を因子得点とした。ANOVA で検討した結果、「他者の情動評価と調整」因子は $F(2,721) = 39.77, p = .000, \eta^2 = .10$ 、「他者の情動認識」因子は $F(2,721) = 35.55, p = .000, \eta^2 = .09$ 、「自己の情動表現」因子は $F(2,721) = 4.13, p = .016, \eta^2 = .01$ 、「自己の情動調整」因子は $F(2,721) = 4.28, p = .014, \eta^2 = .01$ 、「自己の情動利用」因子は $F(2,721) = 17.52, p = .000, \eta^2 = .05$ で有意であった。「他者の情動評価と調整」因子と「他者の情動認識」因子の効果量は中程度であったが、「自己の情動表現」因子、「自己の情動調整」因子、「自己の情動利用」因子の効果量は小さかった。Tukey 法で多重比較を行った結果を Figure 1 に示す。有意差がみられたのは「他者の情動評価と調整」因子、「他者の情動認識」因子、「自己の情動利用」因子では3歳児クラスと4歳児クラスの間 (3歳 < 4歳, $p < .000$) と3歳児クラスと5歳児クラスの間 (3歳 < 5歳, $p < .000$) であり、同様に「自己の情動表現」因子でも3歳児クラスと4歳児クラスの間 (3歳 < 4歳, $p < .05$) と3歳児クラスと5歳児クラスの間 (3歳 < 5歳, $p < .05$) であった。「自己の情動調整」因子では3歳児クラスと4歳児クラスの間には有意差はなく、有意差がみられたのは3歳児クラスと5歳児クラスの間 (3歳 < 5歳, $p < .05$) と4歳児クラスと5歳児クラスの間 (4歳 < 5歳, $p < .05$) であった。

IV 考察

幼児用情動コンピテンス尺度の項目

幼児の情動コンピテンスを測定する項目として本研究で作成した項目について年齢差を検討した結果、20項目中14項目で3歳児よりも4歳児のほうが高く、そのうちの12項目は4歳児と5歳児で差がなかった。このことは、情動コンピテンスの発達時期として3歳から4歳にかけての時期が重要であることを示唆している。Fabes, Eisenberg, Nyman, & Michealieu (1991) は3歳、4歳、5歳を対象として日常場面における情動理解に関する研究を行い、年齢が上がるにしたがって情動の同定が正確になることを示すとともに、情動の原因について特にポジティブな情動の原因を捉える正確性は3歳児が他の年齢に比べて低いことを示している。今回のデータは横断的データであったが、3歳からの発達について縦断データを用いて検討していく必要がある。

また、20項目中6項目については年齢差がみられなかった。年齢差の見られなかった項目については、3歳までに発達的变化があり3歳以降では変化がないものである可能性、5歳以降に変化しているものである可能性が考えられる。さらに、今回は養育者と保育者という視点の違う他者による評定であることから、これらの項目についての評定の違いから結果が相殺されている可能性も考えられる。幼児を対象とする研究において質問紙調査は他者評価とならざるを得ない。他者評価である以上、具体的な行為の有無について聞くような行動レベルでの評定であっても有無の判断には個人の主観が排除されない。今回のような他者の気持ちを認識しているか否かといった認知レベルの評定であればさらにその結果の解釈は慎重に行う必要がある。

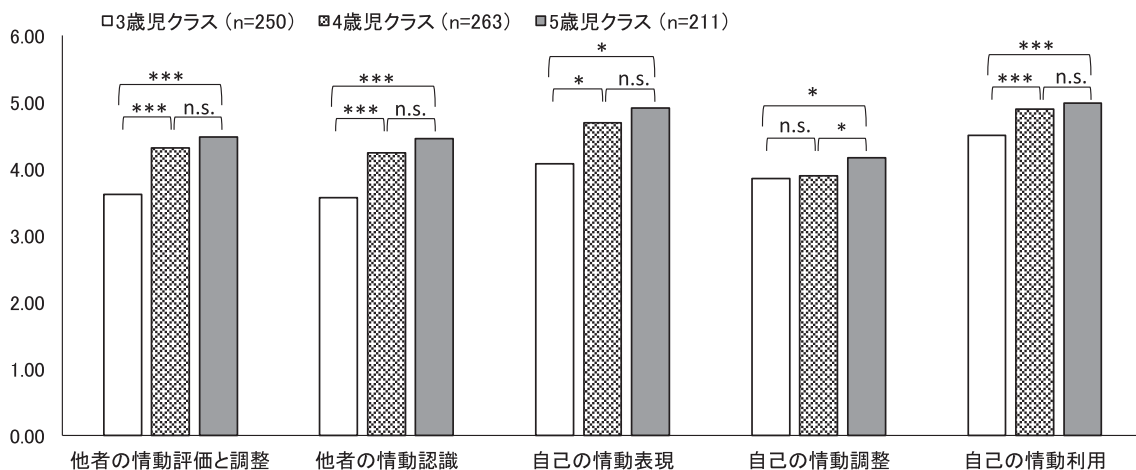


Figure 1 年齢別下位尺度得点

* $p < .5$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

幼児用情動コンピテンス尺度の因子構造

本研究では WLEIS を発展させて開発された児童以上を対象とする情動コンピテンス尺度に基づいて、幼児用情動コンピテンス尺度を作成した。作成の際に想定した下位尺度と同じく 5 因子構造が確認され、5 つの因子それぞれの α 係数は十分な値を示していたことから信頼性のある尺度と考えられる。しかし、信頼性が高いことは一貫性の高さであると同時に似通った項目とも言える。似通った項目では測定しようとしている構成概念が測定できない、つまり妥当性における問題の可能性が生じることになるため、今後、基準関連妥当性、構成概念妥当性を検討していく必要がある。さらに、今回は作成した尺度について α 係数に基づいた検討を行ったが、再テスト法など他の方法での検討も必要であると考えられる。

また、想定どおりの 5 因子構造ではあったものの、第 1 因子に含まれている 16) 周りの人が元気がないとすぐに気づく、という項目の因子負荷量は第 2 因子にも 0.4 以上の負荷量を示しており、尺度作成という点からは除外することも考えられる項目であった。しかし、他者の「元気がない」という単純ではない情動、言うなれば曖昧な情動を評価することに関わる項目も重要であると考え、解釈に注意を要するもの今回は採用することとした。妥当性、信頼性についての課題も含めて、この項目についてもさらなる検討は、今後、縦断データを用いてさらに分析を重ねて検討していく予定である。

幼児期の情動コンピテンスの年齢差

作成した幼児用情動コンピテンス尺度を用いて、因子ごとに横断データによる年齢差の検討を行ったところ、4 つの因子においては 3 歳と 4 歳で差があることが示され、3 歳から 4 歳にかけて発達することが示唆されたが、「自己の情動調整」因子のみ 3 歳と 4 歳の差が示されなかった。しかしながら、3 歳から 5 歳には差が示されたことから、自己の情動調整能力は 3 歳から 5 歳にかけてゆっくり発達するものであると考えられる。今回の結果は横断データに基づく結果であるとともに、上述のように他者評価による結果であることを踏まえると慎重に考える必要がある。発達的变化についても、縦断データを用いた分析を通してさらに検討していく予定である。

本研究では幼児用情動コンピテンス尺度の作成を試み信頼性について確認しているが、今回は質問紙調査として簡便さを優先させ無記名式として養育者と保育者という異なる他者による評定を求めたため、同一対象児に対

するデータの照合はできていない。今後、同一対象児についての養育者評定と保育者評定の照合可能な形での調査を行い、両者の比較を行うことで他者評価の精度を確認していくとともに、各項目について検討を重ねていく必要がある。また、妥当性の検証についても必要である。現在、今回と同様に養育者と保育者を評定者として他の指標のデータ収集も含めた縦断研究を進めている。

情動コンピテンスは円滑なコミュニケーションや適応的な社会行動に重要な役割を果たしていると考えられる。そうした役割を果たしている情動コンピテンスはどのように発達するものであるのかを探求していく上で幼児期からの検討が重要であり、その情動コンピテンスと適応的な社会行動との関連について検討していくことも今後の課題である。

付記

本研究は JSPS 科研費 (JP19K02656) の助成を受けて実施した研究の一部です。本研究にご協力いただきました認定こども園の保護者の皆様ならびに保育者の皆様に心より感謝いたします。

引用文献

- Davies, M., Stankov, L., & Robert, R. D. (1998). Emotional intelligence: In search of an elusive construct. *Journal of Personality and Social Psychology, 75*, 989-1015.
- DeConti, K. A., & Dickerson, D. J. (1994). Preschool children's understanding of the situational determinants of others' emotions. *Cognition and Emotion, 8*, 453-472.
- Fabes, R. A., Eisenberg, N., Nyman, M., & Micalieue, Q. (1991). Young children's appraisals of others' spontaneous emotional reactions. *Developmental Psychology, 27*, 858-866.
- Kotsoni, E. de Haan, M., & Johnson, M. H. (2001). Categorical perception of facial expressions by 7-month-old infants. *Perception, 30*, 1115-1125.
- Law, K. S., Wong, C. S., & Song, L. J. (2004). The construct and criterion validity of emotional intelligence and its potential utility for management studies. *Journal of Applied Psychology, 9*, 483-496.
- Ludemann, P. M., & Nelson, C. A. (1988). Categorical representation of facial expressions by 7 month old infants. *Developmental Psychology, 24*, 492-501.
- Martins, A., Ramalho, N., & Morin, E. (2010). A comprehensive meta-analysis of the relationship between emotional intelligence and health. *Personality and Individual Differences, 49*, 554-564.
- Mayer, J. D., Caruso, D. R., & Salovey, P. (1999). Emotional intelligence meets traditional standards for an intelligence. *Intelligence, 27*, 267-298.
- Mayer, J. D., & Salovey, P. (1997). What is emotional intelligence? In P. Salovey & D. Sluyter (Eds.), *Emotional develop-*

- ment and emotional intelligence: Educational implications. (pp.3-31). New York: Basic Books.
- Mayer, J. D., Salovey, P., Caruso, D. R., & Sitarenios, G. (2003). Measuring emotional intelligence with the MSCEIT v 2.0. *Emotion, 3*, 97-105.
- Michalson, L., & Lewis, M. (1985). What do children know about emotions and when do they know it? In M Lewis & C Saarni (Eds). *The Socialization of Emotions* (pp.117-139). New York: Plenum Press.
- Mikolajczk, M., Roy, E., Luminet, O., Fillée, C., & de Timary, P. (2007). The moderating impact pf emotional intelligence on free cortisol responses to stress. *Psychoneuroendocrinology, 32*, 1000-1012.
- 森野実央 (2010). 幼児期における感情理解 心理学評論. 53, 20-32.
- 野崎優樹 (2015). 情動知能と情動コンピテンスの概念上の差異に関する考察 京都大学大学院教育学研究科紀要. 61, 271-283
- 野崎優樹 (2017). 情動コンピテンスの成長と対人機能 社会的認知理論からのアプローチ ナカニシヤ出版
- Petrides, K. V., & Furnham, A. (2003). Trait emotional intelligence: Behavioural validation in two studies of emotion recognition and reactivity to mood induction. *European Journal of Personality, 17*, 39-57.
- Petrides, K. V., Pérez-González, J. C., & Furnham, A. (2007). On the criterion and incremental validity of trait emotional intelligence. *Cognition and Emotion, 21*, 26-55.
- 櫻庭京子・今泉敏 (2001). 2~4 歳児における情動語の理解力と表情認知能力の発達の比較 発達心理学研究. 12, 36-45.
- Salovey, P., & Mayer, D. (1990). Emotional intelligences. *Imagination Cognition and Personality, 9*, 185-211.
- Schutte, N. S., Malouff, L. M., Simunek, M., McKenley, j., & Hollander, S. (2002). Characteristic emotional intelligence and emotional well-being. *Cognition and Emotion, 16*, 769-785.
- Schutte, N. S., Malouff, J. M., Thorsteinsson, E., B. Bhullar, & Rooke, S. E. (2007). A meta-analytic investigation of the relationship between emotional intelligence and health. *Personality and Individual Differences, 42*, 921-933.
- Takšić, V. (1998). Validacija konstrukta emocionalne inteligencije. [Validation of the Emotional Intelligence Construct]. Unpublished doctoral dissertation, University of Zagreb, Croatia.
- Toyota, H., Morita, T., & Takšić, V. (2007). Development of a Japanese version of the Emotion Skills and Competence Questionnaire. *Perceptual and Motor Skills, 105*, 469-476.
- 豊田弘司・森田泰介・金敷大之・清水益治 (2005). 日本語版 ESCA (Emotional Skills & Competence Questionnaire) の開発 奈良教育大学紀要. 54, 43-47.
- 豊田弘司・桜井裕子 (2007). 中学生用情動知能尺度の開発 奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要. 16, 13-17.
- 豊田弘司・山本晃輔 (2011). 日本版 WIEIS (Wong and Law Emotional Intelligence Scale) の作成 奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要. 20, 7-12.
- 豊田弘司・吉田真由美 (2012). 子どもにおける居場所、情動知能及び学校適応 奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要. 21, 9-7.
- Wong, C. S., & Law, K. S. (2002). The effects of leader and follower emotional intelligence on performance and attitude: An exploratory study. *The Leadership Quarterly, 13*, 243-274.
- Young-Browne, G., Rosenfeld, H. M., & Horowitz, F. D. (1977). Infant discrimination of facial expressions. *Child Development, 48*, 555-562.